早稲田大学大学院日本語教育研究科

修　士　論　文　概　要　書

論　　文　　題　　目

ドイツ語母語話者の日本語における発音の特徴と指導法

―英語母語話者との比較から―

大戸　雄太郎

２０１８年　３月

本研究は、ドイツ語を母語とする学習者（以下 GS）の発音の特徴を明らかにし、発音指導に活かすための研究である。その際、より研究が進んでおり言語的にも近い母語を有する英語を母語とする学習者（以下 ES）も同時に調査し、結果を比較検討することで、GS 固有の特徴を明らかにする。本論文の章立てに沿い、概要を記述する。

第一章　序論

第一章では、本研究に至った背景を述べた上で、研究目的を提示した。それから、本論文の構成を示し、本研究の用語の定義を行った。

本研究の研究動機は、1）筆者の広島での生活が長く東京方言のアクセント習得に苦労したこと、2）ドイツ語の発音習得に苦労したこと、3）あるドイツ語を母語とする日本語学習者が日本語の発音を苦手としていたことに気づいたこと、の 3 点であった。それらの経験から、発音は自然に身に付かず、何らかの方法で学習する必要があるが、その学習機会は少ないと認識するようになった。筆者に、日本語の東京方言やドイツ語の発音の学習機会があまりなかったように、ドイツの学習者も、日本語の発音の学習機会があまりないのではないかと考えるようになった。

本研究の問題意識として、1）GS に対しての日本語音声教育はまだ不十分な段階であること、2）GS の母語に着目した発音指導法についての先行研究が見当たらないこと、の 3 点を挙げた。一方で、ドイツ語に近い言語である ES に関する研究や指導教材は GS に比して進んでいると考えた。GS の発音の特徴は、ES の発音の特徴とどのように異なっているのかという対照研究を通じて、共通点・相違点を明らかにする。共通点・相違点を踏まえることで、ES のための発音指導法を応用し、GS のための発音指導法を提案できると考えた。

本研究の研究目的は、「GS の日本語の発音の特徴を明らかにし、発音指導に活かす」ことである。研究目的を達成するために、3 つのリサーチクエスチョン（以下 RQ）を設定した。

RQ1：GS・ES は日本語の発音をどのように生成するか。

RQ2：GS・ES の発音と、発音した単語の理解度・使用度・発音の容易度には相関がみられるか。

RQ3：GS・ES は日本語の発音についてどのように認識しているか。

なお、本研究は「発音」の中でも、特に GS にとって難しいと考えられるアクセント、

特殊拍と拗音、外来語、語末の有声開音節の発音の特徴を調査した。

第二章　先行研究

第二章では、まずドイツ語・英語・日本語の三言語の音声についての先行研究をまとめた。次に、日本語の音声習得と発音指導についての先行研究を、GS や ES に関連するものを中心にまとめた。そして、ドイツとイギリスの日本語音声教育についての先行研究をまとめた。最後に、先行研究を踏まえ、先行研究に不足している点をまとめた上で、本研究の位置付けを述べた。

先行研究に不足している点は以下の 2 点にまとめられた。1）英語とドイツ語の音韻構造の違いから、母語干渉の考えに基づけば、ES と GS の日本語の発音にも違いがあるのは当然である。そのため、GS の母語であるドイツ語に着目した音声習得研究が行われるべきであるが、ES に比べて GS を対象とした音声習得研究は少ない。それゆえ、GS の発音の実態が十分に解明されていない。2）GS の発音の実態が明らかになっていない現状、GS に対してどのような音声教育を行うべきか明らかになっていないはずである。しかし、GS に対する発音指導についての先行研究も非常に少なく、これまでどのような音声教育が行われていたか、どのような発音指導が求められているかなどの現状が明らかになっていない。

したがって、本研究を以下のように位置付けた。

①GS と ES それぞれの日本語の発音の特徴を解明する横断的研究である。

②GS と ES の発音の特徴を比較し、共通点や相違点を明らかにする対照研究である。

③GS と ES の比較から、ES のための発音指導が GS にも応用可能かを考察し GS のための発音指導法を提案する研究である。

④GS と ES の発音に関係する要因を分析し、GS のための発音指導法開発の一助となる基礎研究である。

⑤GS と ES のインタビューから、音声についての認識や音声学習背景を引き出し、ドイツとイギリスの日本語音声教育の実態を明らかにする研究である。

第三章　調査Ⅰ：生成調査

第三章では、調査Ⅰの生成調査について、調査目的を確認し、調査協力者、調査方法、調査手順、分析方法を示した後で、分析結果を記述した。その上で、結果のまとめおよび

考察を行った。

本調査の目的は、RQ1「GS・ES は日本語の発音をどのように生成するか」を解明することであった。そこで、GS と ES を対象に、日本語の発音を生成調査した。本調査で調査する発音は、先行研究の概観から GS にとって苦手であると予測された、アクセント、特殊拍と拗音、外来語、語末の有声開音節であった。

本研究の調査Ⅰ・調査Ⅱで用いる調査語は、以下の三種類が設定された。

調査語 A：アクセント・特殊拍と拗音調査　60 語

調査語 B：外来語調査　40 語

調査語 C：語末の有声開音節調査（無意味語）　56 語　計 156 語

本調査の結果から明らかになったのは以下の 6 点であった。（RQ1 の答え）

①GS は、特殊拍を含む調査語 A の音の評価が ES より低い。

②GS と ES は「拗音」、「長音」、「促音の前の音」を高いピッチで発音する傾向がある。

③GS と ES は、語頭に/z/があると、/w/があった場合よりも、語末の「ト」と「ド」の区別が難しくなる。

④GS と ES は、促音の後に「ド」があると発音しづらい。

⑤GS と ES において、特定の音環境で特定のアクセントの誤用が起きるとは言い切れず、予測しづらい。

⑥GS と ES の発音の一部は、日本語のアクセントのルールに当てはまらない。

第四章　調査Ⅱ：質問紙調査

第四章では、調査Ⅱの質問紙調査について、調査目的を確認し、調査協力者、調査方法、調査手順、分析方法を示した後で、分析結果を記述した。その上で、結果のまとめおよび考察を行った。

本調査の目的は、RQ2「GS・ES の発音と、発音した単語の理解度・使用度・発音の容易度には相関がみられるか」を解明することであった。そこで、GS と ES を対象に、調査Ⅰの単語について、理解度、使用度、発音の容易度を質問紙にて調査した。

本調査の結果から明らかになったのは以下の 4 点であった。（RQ2 の答え）

①GS は調査語 A・B の「発音の容易度」の認識と「音の得点」、調査語 C の「発音の容易度」の認識と「トとドの正誤の得点」に相関がある。

②ES は調査語 A において、「発音の容易度」の認識と「音の得点」には相関がないが、

「発音の容易度」の認識と「アクセントの得点」には相関がある。

③GS と ES 双方において「理解度」の認識と「アクセントの得点」には相関があるとはいえない。

④GS の「理解度」「使用度」「発音の容易度」の認識はいずれも「アクセントの得点」とは相関があるとはいえない。

第五章　調査Ⅲ：インタビュー調査

第五章では、調査Ⅲのインタビュー調査について、調査目的を確認し、調査協力者、調査方法、調査手順、分析方法を示した後で、分析結果を記述した。その上で、結果のまとめおよび考察を行った。

本調査の目的は、RQ3「GS・ES は日本語の発音についてどのように認識しているか」を解明することであった。そこで、GS と ES を対象に、調査Ⅱの質問紙を参照しながら、難しいと感じる発音について、また発音や発音学習に対する考えについて、インタビューにて調査した。

本調査の結果から明らかになったのは以下の 5 点であった。（RQ3 の答え）

①単音、拗音、語末の開音節においては、GS と ES の間で難しいと捉えている発音に差が見られた。

②促音や長音、外来語、二連母音においては、GS と ES ともに難しいと捉えているようだった。

③ドイツやイギリスの大学では発音に特化した授業は存在しないことが分かった。GS と ES の一部は、発音学習経験があり、発音学習を前向きに捉えていることが分かった。

④GS と ES 全員が、自分自身の日本語の発音が良いと思っていないようであった。また全員が、発音の問題で言いたいことが伝わらない経験をしていた。

⑤発音そのものに対する考えについては、GS と ES の母語の差以上に、個人の発音学習経験の違いが考えの違いに影響している可能性が高かった。発音学習経験のあった学習者は、発音の重要性について認識していることが分かった。

第六章　結論

第六章では、まず研究目的を確認した上で、RQ に答えた。次に、RQ の答えを踏まえた

上で、研究目的を観点に総合的考察を行った。そして、日本語教育への示唆を述べ、最後に今後の課題を挙げた。

RQ の答えは、第三章・第四章・第五章の章末に述べたとおりであるが、RQ1 の答えとしては 6 点が、RQ2 の答えとしては 4 点が、RQ3 の答えとしては 5 点が明らかになり、GS と ES の発音の生成・意識両方に違いがあることが明らかになった。

総合的考察は、研究目的である「GS の日本語の発音の特徴を明らかにし、発音指導に活かす」ことを観点に、5 つの音声項目ごとに行った。それぞれ、1）単音、2）アクセント、3）特殊拍と拗音、4）外来語、5）語末の有声開音節、であり、いずれも GS にとって難しい発音であることを述べ、発音指導において注意すべき点を項目別に示した。

日本語教育への示唆としては、1）日本語音声教育への示唆、2）音声習得研究への示唆と 2 つの観点から示唆を行った。それぞれ以下に示す。

1）本研究で GS にとって難しい日本語の発音が明らかになり、発音指導の必要性が浮き彫りになった。また、GS と ES の発音の特徴には生成と意識ともに違いがあることが明らかになり、近い母語話者同士であっても、ES のための音声指導法を GS にそのまま適用することは難しいことが分かった。本研究の結果は、GS の発音指導法や発音指導法教材開発に活かせるという点で、GS の音声教育にとって意義があり、GS のための発音指導教材案として「ドイツ語母語話者のための日本語発音レッスン」を巻末資料に示した。また、本研究の結果からは、ドイツとイギリスの日本語音声教育は発展途上であることが分かり、両国での音声教育の実態調査や、現地の学習者の実態調査から、日本語音声教育の発展が見込まれると提言した。

2）本研究において、GS と ES の発音の特徴の比較検討から、GS と ES に差が見られた部分、見られなかった部分がそれぞれ明らかになった。GS と ES の結果を比較しつつ、GS の発音の特徴を明らかにしたことは、GS の音声習得研究に寄与できる部分が多いと考えられる。本研究の結果から、母語干渉による予測には限界があることが分かったため、発音の実態を明らかにするためには、予測のみではなく、実態調査が必要であることが示唆される。今後も多くの実態調査により、音声習得研究の発展が可能になると提言した。

最後に、今後の課題として、1）本研究で提案した発音指導教材案の効果についての実践研究、2）ヨーロッパの日本語音声教育の発展を視野に入れた、フランス語やスペイン語など他のヨーロッパ言語を母語とする学習者の音声習得研究、の 2 点を挙げた。